蜻蛉日記下巻における漢文的表現

――兼家との関係の相対化へ――

斎藤　菜穂子

一　漢文的表現から探る下巻論への試み

蜻蛉日記下巻は、中巻での兼家との関係を凝視し自らを精神的に追いつめる過程を経て、中巻末の透徹した人生観照に続き始められる。中巻末までの世界を兼家との葛藤の克服と見たときに、下巻はその位置づけや評価がこれまで定めがたいとされてきた。主題の拡散とも身辺雑記的とも評される下巻はどのような表現世界であるのか。上中巻とは異質ないくつかの記事の特徴については指摘が積み重ねられているが、下巻全体につながる意味づけという視点では未だ研究が乏しい状況である。本稿では、下巻の一部分に集中的に用いられている漢文的表現を検討することで、下巻のありようを探る手だてとしたい。それによって、特徴的な表現世界の意義を下巻全体において位置づけることが出来るのではないかと考える。

蜻蛉日記に漢詩文の影響が様々なレベルで見られることは古くから指摘されており、品川和子氏ははやくにその詳細な整理を行っておられる。[1] 近年では、蜻蛉日記の求婚期・新婚期に既に白詩等との発想や表現の重なりが見られることが細かに論じられ、[2] また、漢詩文のアンソロジーが編纂される天暦期において、漢文表現が精選され受容されていった様相を見通す視点も提出されている。[3] 蜻蛉日記における漢詩文の影響の事例がほぼ確認された今、蜻蛉日記と漢詩文表現との関わりの意味を、より広い視野に立って見ることが出来よう。今回取り上げる下巻天禄三年二月末からの記事は、従来漢詩文の取り込みが意識的になされている唯一の部分とされるが、[4] この箇所には、漢詩文だけでなく漢文日記をも想起させる表現が散見され、更に一日ずつ追って書かれる日次の記のようになっていることが指摘でき、漢文的な独自の表現をとっていると考えられるのである。

二　頻出する漢詩文表現と漢文日記的表現

では該当本文を引用していく。

〈ア〉さて、廿五日の夜、宵うちすぎてののしる。火の事なり

けり。「いと近し」など騒ぐを聞けば、憎しと思ふところなりけり。その五六日は例の物忌と聞くを、「御門の下よりなん」とて、文あり。なにくれとこまやかなり。今は、かかるもあやしと思ふ。七日は方ふたがる。

八日の日、未の時ばかりに、「おはしますおはします」とののしる。中門おしあけて、車ごめひきいるるをみれば、御前の男ども、あまたながえにつきて、すだれ巻きあげ、したすだれ左右おしはさみたり。榻もてよりたれば、おりはしりて、紅梅のただいまさかりなる下よりさしあゆみたるに、似げなうもあるまじう、うちあげつつ、「あなおもしろ」といひつつ、あゆみのぼりぬ。

またの日を思ひたれば、又、南ふたがりにけり。「などかはさは告げざりし」とあれば、「さきこえたらましかば、いかがあるべかりける」とものすれば、「違へこそはせましか」とあり。「思ふこころをも今よりこそは心みるべかりけれ」など、なほもあらじに、誰ももものしけり。ちひさき人には、手習ひ、歌よみなど教へ、ここにてはけしうはあらじと思ふを、「思はずにては、いと悪しからん。今かしこなるともろともにも、裳着せん」などいひて、日くれにけり。「おなじうは、院へ参らん」とて、ののしりて出でられぬ。このごろ、空の気色なほりたちて、うらうらとのどかなり。①暖かにもあらず、寒くもあらぬ風、②梅にたぐひて、うぐひすをさそふ。にはとりの声など、さまざま和うきこえたり。屋の上をながむれば、すくふ雀ども、瓦の下を出で入りさへづる。③庭の草、氷にゆるされがほなり。

傍線①は、「不明不暗曨々月　非暖非寒漫々風」（白「嘉陵夜有懐」・『千載佳句』春夜・八三）という白詩の一節を明らかに受けている。「あつからずさむくもあらずよきほどにふきくる風はやまずもあらなん」（千里集・七六「非暖非寒漫漫風」）は同じ詩句による句題和歌だが、それよりも表現的に近く取り入れておりほとんど訓読的と言ってよい。

傍線②は、「花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」（古今集・春歌上・一三「寛平御時后宮歌合の歌」・紀友則）を意識したもの。「花のかを」歌については、「この和歌は『寛平御時后宮歌合』の歌で句題和歌であり、その詩は、「先遣和風報消息、続教啼鳥説来由」（白　巻十七　春生）『千載佳句』早春（八）である」[5]と解かれており、また、「禁欲的に絞ったはてにも、やはり次のようなものは白詩との浅からぬ関連を否定しきれぬ創作歌の例と認めてよいであろう」[6]としてあげられているところで、傍線②に引かれている和歌は漢詩文世界を濃厚に内包したものであると言える。

傍線③は、「樹根雪盡催花發　池畔氷消放草生」（白「歎春風」・『千載佳句』早春・一三）の詩句をとった表現であり、傍線①②③と集中して漢詩文を取り込んでいることになる。この箇所は従来、「主として漢詩的な情趣を媒介とした自然描写であるが、それが漢詩を技法的によくこなした表現であるというだけではすまされず、まさに作者の内なる世界と一体化した漢詩的情趣の新たなる発見と見るべきなのであつて、彼女の生活史の切実な再現に

よつて到達した心境と切り離しがたく結びついていることを忘れてはならない[7]」というように作者の心境と結びつけて解釈されてきたが、続く部分をも検討すると、表現方法としての別の意義も見出されてくるのではないか。

〈ア〉に続く本文をあげる。

〈イ〉閏二月のついたちの日、雨のどかなり。それよりのち、④天はれたり。三日、方あきぬと思ふを、音なし。四日もさて暮れぬるを、あやしと思ふ思ふ、寝て聞けば、夜中許に、火の騒ぎする所あり。「近し」と聞けど、物うくて起きもあがられぬを、これかれ訪ふべき人、徒歩からあるまじきもあり。それにぞ起きて、出でて答へなどして、「火しめりぬめり」とてあかれぬれば、入りてうちふすほどに、先おふ者、門にとまる心ちす。あやしと聞くほどに、「おはします」といふ。燈火の消えて、はひいるに暗ければ、「あな暗、ありつるものを頼まれたりけるにこそありけれ。近き心ちのしつればなん。今は帰りなんかし」といふいふ、うちふして、「宵よりまゐりこまほしうてありつるを、をのこどもも、みなまかりでにければ、えものせで、昔ならましかば、馬にはひのりても物しなまし、なでふ身にかあらむ、なにばかりのことあらば、かくて来なん、など思ひつつ寝にけるを、かうののしりつれば、いとをかし。あやしうこそありつれ」など、心ざしありげにありけり。明けぬれば、「車など、異様ならん」とて、急ぎ帰られぬ。六七日、物忌と聞く。

八日、⑤雨ふる。夜は石の上の苔、苦しげにきこえたり。十日、賀茂へ詣づ。「忍びて、もろともに」といふ人あれば、「なにかは」とて、詣でたり。いつもめづらしき心ちするところなれば、今日も心のばふる心ちす。田かへしなどするも、かうしけるはとみゆ。紫野どほりに、北野にものすれば、沢にもの摘む女、童べなどもあり。うちつけに、ゑぐ摘むかとおもへば、裳裾おもひやられけり。船岡うちめぐりなどするも、いとをかし。暗う家に帰りて、うちねたるほどに、門いちはやくたたく。胸うちつぶれてさめたれば、思ひのほかに、さなりけり。心の鬼は、もし、ここ近き所に障りありて、帰されてにやあらんと思ふに、人はさりげなけれど、うちとけずこそ思ひ明かしけれ。つとめて、すこし日たけて帰る。さて、五六日許あり。

傍線④は、「蜻蛉日記注解」に、

底本・阿波本・松平本・彰考館本・大東急本、「天」に「ソラ」と片仮名の傍記。注者が「天」の字の読み方を記したものであろうが、「天晴」が漢文日記の書法であることはいうまでもない。雨後晴れの天候は、たとえば「従丑時許雨下、深雨也、後天晴」（御堂関白記、寛弘二年正月十一日）のごとくに書かれる。漢文日記の表記とのつながりをうかがわせるけれども、「後天晴」が単に天候の記録にすぎないのに対して、「それよりのち、天晴れたり」には空模様の変化が動的に写し出されているところに注意を要するであろう。[8]

と既に指摘があるように、漢文日記的な表現を取り入れている。

傍線⑤は「春風暗剪庭前樹　夜雨偸穿石上苔」（傅温「山居」・

『千載佳句』春夜・八五）の詩句による。

以上の傍線①③⑤は依拠する漢詩文を明確にできる表現であり、これらは白詩や傅温の詩を引いたものだが、その詩句はみな九三〇年頃成立の千載佳句に入っていて、蜻蛉日記執筆当時は千載佳句が流布した頃とされている。蜻蛉日記が千載佳句に直接依ったかどうかは決めがたいが、これらの詩句は当時よく知られていたと言える。千載佳句は漢詩を二句ずつ抜き出すのだが、蜻蛉日記当該部分ではみなその中の一句のみを引いていて、対であるもう一句の内容を浮かび上がらせる表現にはどれもなっていない。漢詩文の取り込みは、引歌のような一部を表現に組み込むことで残りの部分を浮かび上がらせる表現方法ではないのであり、漢詩文の断片的な世界と共にその文体を取り入れることに、漢詩文表現の摂取の意味が見出されそうである。

傍線③の「ゆるされがほ」や傍線⑤の「苦しげにきこえたり」は、単に漢詩の一部を訓読したに留まらない表現上の装飾が施され、春草ののびやかさを親しく感受し、また雨に打たれる苔に苦しそうだと心を寄せている。しかし、蜻蛉日記の他の部分では、「聞かじと思へども、うちとけたる寝も寝られず、夜ながうしてねぶることなければ、さななりと見聞く心ちは、なににかは似たる」（上巻・天暦十年秋。『白氏文集』「上陽白髪人」による「夜長無眠天不明」の一部取り込み）や、「人悪げなるまでもあれど、石木のごとして明しつれば」（中巻・天禄二年一月。『白氏文集』「李夫人」の「人非木石皆有情」等による発想の取り込み）のように、漢詩文の取り入れが、ごく一部を和文化して慣用句的に用い、兼家をめぐる葛藤を描く前後の内容や文体と融合させていたことを考えると、当該部分は漢詩一句を限定的に示す引き方で、かつ前後の叙述からは文体的にも内容的にも独立した、特異な表現であると言えるのではないか。

続く本文をあげる。

〈ウ〉十六日、雨の脚、いと心ぼそし。明くれば、この寝るほどに、こまやかなる文みゆ。「今日は、方塞がりたりければなん。いかがせん」などあべし。返りごとものして、と許あれば、みづからなり。日もくれがたなるを、あやしと思ひけんかし。夜にいりて、「いかに、幣帛をやたてまつらまし」など、やすらひの気色あれど、「いとようないことなり」など、そそのかし出だす。歩み出づるほどに、あいなう、「夜数にはしもせじとす」と忍びやかにいふを聞き、「さらば、いとかひなからん。異夜はありと、かならず今宵は」とあり。それもしるく、その後おぼつかなくて、八九日許になりぬ。かく思ひおきて、「数には」とありしなりけりと思ひあまりて、たまさかに、これよりものしけること、

かたときにかへしよかずをかぞふればしぎのもろはもたゆしとぞなく

かへりごと、

いかなれやしぎのはねがきかずしらずおもふかひなきこゑになくらん

とはありけれど、おどろかしても、悔しげなるほどをなん、

いかなるにかと思ひける。このごろ、⑥庭もはらに花ふりしきて、海ともなりなんと見えたり。けふは廿七日、⑦雨、昨日の夕べよりくだり、風、のこりの花をはらふ。

傍線⑥は、底本「にはもはらに」だが「庭もはだらに」と改訂されることが多い。伊牟田経久氏の、『もはらに』という語は、いわゆる漢文訓読語であり、平安時代の和文脈の作品中には、いまだその例を見出しえない特異語である」「今昔物語集にかなりの例が見えるが、それらをふくめて、もっぱら人間の行為――とりわけ精神活動――に関して用いられていることが、注目される」「このように［「庭もはだらに」と・稿者注］改訂するには、『た』補入の処置をとらなければならないし、歌の表現を散文に用いた特殊表現ということになるが、それはともかく、『うみともなりなん』という表現内容との関連については、さらに吟味が必要であろう」[9]との指摘により、例えば『新編日本古典文学全集』では、

「庭…海ともなりなむ」および「雨…残りの花を払ふ」には、漢詩文的な情趣も漂う。また底本「にはもはらに」は不審。和文脈の「もはら」はつねに否定を伴うし、漢文訓読語「専（モハラニ）」を風景に使う例もない。私案「庭もはだらに」と改める。和歌的表現になるが、庭にもはらはらと花が散り敷いて。「わが宿に鶯いたく鳴くなるは庭もはだらに花や散るらむ」（兼盛集）。「はだらに」散る花には、作者の心境も暗喩されていよう。[10]

などと改訂される。

しかし、伊牟田氏も触れられるように「はだら」という「雪や霜がまばらに降るさま」[11]の意味では、「海ともなりなん」とのつながりが滑らかではなく、底本を含む古本系諸本がすべて「もはらに」となっており、そのままで表現内容に矛盾はないことからも、積極的に改訂する必要はないと思われる。すると、ここでは「もはらに」という漢文訓読的な表現があえて用いられているということに注意するべきだろう。

傍線⑦は、『蜻蛉日記全注釈』に「雨云々、風云々と漢文の対句形式のごとき文体になっている。『雨くだる』は、記録日記に『雨下』と記すのを和文にやわらげた趣[12]」と指摘があるように、傍線④「天はれたり」と共に「雨……くだり」は和文脈では異例で、漢文日記において「廿二日、従午時許、大雨下、電雷有聲高事、終日時々雨下、入夜参内、即退出」（『御堂関白記』寛弘三年八月二十二日）[13]などと例を多く見出すことができ、漢文日記を訓読したような表現なのである。「のこりの花をはらふ」も漢文訓読的な言い方であるとの指摘があり[14]、「十六日」に続く「雨の脚」も、漢語「雨足」「雨脚」の訓読からもたらされた表現と言える[15]。この傍線⑥⑦は対句的な表現が見られ、格助詞を省き動詞の終止形で文を閉じるなど、簡潔で漢文訓読的である。

更にもう一つ、漢文的表現という点で、「瓦」について付け加えられないだろうか。本文〈ア〉の太字に「瓦」とあるが、道綱母の家は瓦葺きだったのだろうか。『平安時代史事典』に、「公家住宅は『年中行事絵巻』に描かれているところから、寝殿や対屋・二棟廊・渡廊・中門廊等は厚い軒付きの檜皮葺屋根であった

ことがわかる」「檜皮葺は平安・鎌倉時代ごろの貴族住宅などに最も多く、日本的な優美さをほしいままにしていた[16]」とあるように、邸は檜皮葺であったとみるのが妥当なようだ。「檜皮葺など瓦葺以外の屋根でも棟だけは瓦積みにされることが多く、また棟の装飾のために軒瓦も用いられる[17]」ともあるが、表現において「瓦」と出てくることにはやはり留意したい。『古典対照語い表』[18]によると、「瓦」は蜻蛉日記にここ一例、枕草子と源氏物語に各二例、大鏡に一例、また「瓦葺」が枕草子に二例見られるのみで、万葉集・竹取物語・伊勢物語・古今集・土佐日記・後撰集・紫式部日記・更級日記には例が見られない。瓦の技術は中国から入ったものであり、枕草子「故殿の御服の頃」では、「官のつかさの朝所」という太政官庁の東舎へ移った時を、「屋のさま、いと平に短く、瓦葺きにて、唐めき、さま異なり」と述べていて、普段生活している殿舎との違いに目を向け唐風であるとしていることに注意される。増田繁夫氏は「当時の住宅で瓦の用いられることは珍しく、作者の屋敷は高級な造りだったのであろう。あるいは、漢詩などによった部分かもしれぬ[19]」と述べておられる。和文での用例の少なさに比して、漢文、例えば千載佳句に「瓦」は、「暖銷霜瓦津初合　寒減氷渠凍不成」（白「早春」・『千載佳句』早春・七）、「雨鳴鴛瓦収炎気　風巻珠簾送暁涼」（丁仙芝「陪岐王宅宴」・『千載佳句』早秋・一五四）、「池氷暁合膠船底　楼雪晴消露瓦溝」（白「歳暮」・『千載佳句』冬興・二二一）のような例がいくつも見られる。すると、この箇所は更に、漢文風の表現が色濃い部分ということが出来るのではないか。

以上のように、当該部分には漢文イメージを容易に想起できる表現が集中しており、このような箇所は、蜻蛉日記において他に見出すことが出来ない。

また、これまでほとんど問題視されなかった[20]が、当該部分がほぼ日次で書かれていることは重要ではないだろうか。蜻蛉日記の下巻は日付を明示することが増え、まさに「日記」のように日を追って書かれるような記述になっているが、この部分は最もその日次性が強い所なのだ。本文で日付を示すところを四角で囲んだが、「廿五日」「その五六日」「七日」「八日」、「閏二月のついたちの日」「それよりのち」「三日」「四日」「明けぬれば」「六七日」「八日」「十日」「つとめて」「五六日許あり」「十六日」「明くれば」「八九日許になりぬ」「けふは廿七日」と、日付としては明示されなくても何日間と経過はいちいち辿られていて、触れられない日はほとんどない。他の場面では、日付が頻繁に見えるといっても、一週間また十日間位触れられずにとばされる所などあり、この箇所のようにひと月以上にもわたって、毎日が押さえられていくことはないのである。この日次性もまたここにのみ特徴的な表現方法で、先の天候記述と共に、漢文日記的と言うことが出来よう。

この場面には、漢詩文引用・漢文日記的な訓読調の使用と日次性という漢文的な特徴が見られるのである。

三　漢文的表現の意味

この本文〈ア〉〈イ〉〈ウ〉が以上の特殊な表現をもって描かれ

ていることには、どのような意味が見出せるのだろうか。

記事を順に追うと、「その五六日」は兼家から文が来たという内容、「七日は方ふたがる」は兼家の動向を示す表現、「八日」の記事は訪れた兼家との関係を丹念に綴っている。「三日、方あきぬと思ふを、音なし」は兼家を意識したものであり、続く「四日」も火事騒ぎから兼家訪問へとつながり、「明けぬれば、『車など、異様ならん』とて、急ぎ帰られぬ」と去った後引き続いて「六七日、物忌と聞く」とされ、「十日」も賀茂詣でから帰ってすぐ兼家の訪れがあり、「十六日」が「明」けての彼とのやりとり、「八九日許」たっての兼家との贈答歌が記される等、兼家との関わりがここにはこまかに描かれている。

しかしその内容を見ると、本文〈ア〉における方違えを巡る皮肉な言葉の応酬と点線部「なほもあらじに、誰もものしけり」という対立的状況や、本文〈イ〉の点線部「人はさりげなけれど、うちとけずこそ思ひ明かしけれ」という鬱屈感、また本文〈ウ〉の点線部、贈答歌による「おどろかしても、悔しげなるほどをなん、いかなるにかと思ひける」との後悔の念など、道綱母と兼家との齟齬が様々にあらわれたものなのだ。特に最後の贈答歌は、「たまさかに」とあるように、久しぶりの兼家への詠歌であるが、古今集の「暁のしぎのはねがきももはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく」（恋歌五・七六一）を引いて独り寝の嘆きを歌うのに対して、兼家の返歌は、羽がきして数えるのを自己の思慕に言い替えて「いかなれや」と道綱母の感情を不審とし、道綱母歌の思いは受け止められない。これは、当該部分の直後三月の記事にも、「いとものあはれなるにそへても、音なきことを猶おどろかしけるも悔しう、例の絶え間よりも安からずおぼえけんは、何の心にかありけん」と、苦い感情としてあとを引いていく、二人の最後の贈答歌である。

当該記事は、養女迎えの記事の直後であり、「うち笑ひて出でられぬ。それより後、文などあるには、かならず、『小さき人はいかにぞ』など、しばしばあり」という養女を迎えたことによる関係の好転を感じさせる文脈につづき、そして、二人の齟齬を明らかにする贈答歌をもって終っていた。ここは兼家との関わりが漸進的に齟齬を来してくる様相をあらわしており、そのような場面に漢文的な表現が頻出して、ひと月余りもの日々を取り押さえている。漢詩文の取り入れはみな兼家との関わりを描いた直後にあって、漢詩世界を断片的に組み込み清明な自然描写となっており、漢文日記的な天候叙述や漢文的文体も、簡明な表現で人事の外の自然界を明朗に描出する。それは、兼家との関わりから離れて春の季節感に沿う自然を叙述していて、兼家に意識が集中していく時間の流れを一旦切るものとなっている。

従来の自然描写――特に和歌が介在する――、例えば、

それより後、しひてつれなくて、「例のことわり、これ、としてかくして」などあるもいと憎くて、言ひ返しなどして、言絶えて廿余日になりぬ。あらたまれどもといふなる日の気色、鶯の声などを聞くままに、涙の浮かぬ時なし。

（中巻・天禄二年春）

〈「ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふ

り行く」（古今集・春歌上・二八）を引く〉

などとは異なって、漢文的な自然描写には、兼家との関係への嘆きを映し出していく要素は薄い。伊牟田経久氏が『蜻蛉日記』の、特に上中巻の自然描写は、作者の心情と自然とが響き合い一体化した叙述となっており、それは和歌的発想に支えられた表現と言ってよい。ところが、先に見た漢詩句をふまえた自然描写は、作者の心情と無関係ではないけれども、その自然の中に位置する自分をもふくめて客体化したとらえ方になっている。つき離し、冷徹した目で見つめる姿勢とでも言おうか。これは、下巻に到達しえた作者の心境の、一つの具体的な表れとして注目してよい[21]」とされるように、和歌で表現される風景よりも抑制の利いた、客観的な表現となっている。

当該場面のしばらく前から、兼家の描写が細やかになされ、兼家の訪れの後に自然描写がみられるというパターンがある。そこでは、「簾をまきあげてながむれば、『あなさむ』といふ声、ここかしこにきこゆ。風さへはやし。世の中、いとあはれなり」（天禄三年二月）、「いかなるにかありけん、このごろの日、照りみくもりみ、いと春さむき年とおぼえたり。夜は月あかし。十二日、雪、こち風にたぐひて散りまがふ。午時許より雨になりて、静かに降りくらすにしたがひて、世の中あはれげなり」（同）というように、兼家が去った後、自然を眺め繰り返し「世の中あはれなり」という感慨を叙するのだが、当該部分ではこのような直接的な嘆きはあらわれず、断片的に季節の様相を提示している。傍線①②③は春の穏やかな情景を描き出すことに徹しているし、傍線⑥⑦も落花の景を端正に叙し、漢文的表現は日々の兼家をめぐる感情と関わりあわない。下巻になっても明らかに存在する兼家とのずれを内包しつつ、従来の散文表現で綴るなかでは兼家への意識に深く傾斜していったところを、文体としても表現世界としても異質な漢文的な要素を取り込むことで、それから距離をとっているのである。

下巻には、兼家から精神的に離れようとする傾向が、巻頭の「今年は、天下に憎き人ありとも、思ひなげかじなど、しめりて思へば、いと心やすし」等に見られるが、その下巻においても兼家との齟齬が顕在化してくる日々を、当該記事は非日常的な漢文的表現を差し挟んでいくことで相対化し、兼家との距離を取り直している。この前、下巻冒頭部に繰り返し「世の中あはれなり」と深い嘆きを述べていた状況があり、一方この後は兼家の訪れが稀になって、「又の日は、例の方ふたがると知る知る、昼間にみえて、『御さいまつ』といふほどにぞ帰る」（天禄三年三月）などと淡泊に描かれ、中川転居へとつながっていくことを思うと、当該部分は、嘆きに傾斜しがちな状態において、異次元に視点を移すことによって兼家をめぐる感情から離れ、距離を内包した関係を甘受する方向性へと作品世界の舵を取っていると言えよう。

当該記事は「養女迎え」の部分に続くものであり、「養女迎え」の記事は、本来の日付を内的な時間によって組み替えて直前に描かれる夢占いが養女引き取りの導入部として意味づけられていること、道綱母が同席していなかった兼忠女と兄法師とのやりとりの描写を際だった超越的視点をもって物語的に構成している

こと、「昔物語のやうなれば、みな泣きぬ」とあること等から、従来「物語的」と言われ注目されている。

「養女迎え」と共に下巻の三つの柱とされ、当該部分後にある「道綱恋愛歌群」と「遠度求婚」も同様に考えられており、「遠度求婚」は物語的構想を持つとされ、「道綱恋愛歌群」は私家集・歌物語的でありまた物語的構図が見られると指摘される。[22] 蜻蛉日記は「ものはかない身」を描くという主題の表現において中巻末に一つの到達を迎え、下巻では新たな表現世界を構築しようとしているのだが、当該部分は漢文的表現を様々に挟み込む新しい方法を採り、作品世界の変質を導いていくと意味づけられるのではないだろうか。

下巻の三つの柱はみな、新たな表現世界を自立させようとしつつも、内面的には兼家との関わりを求めている記事であると指摘される。「養女迎え」は関係を取り留めようとするためといえるし、あとの二つも間接的なものに変化しながら兼家とのつながりを心の底で求める、また代償としての意味が見出せる。[23] この「道綱恋愛歌群」と「遠度求婚」には、当該部分における兼家への執着から距離を取る表現世界を受けて、兼家の描写はほとんどないのだが、指摘されるように、兼家の影が間接的ないし潜在的なものとしてうかがわれるのだった。しかし当該部分は、記事内部では兼家との強まる齟齬を描出しつつも、漢文的表現を用い穏やかな春の情景を表現することによって、悲嘆に傾きがちな日常を切り離していく。先の物語的ないしは私家集的表現が、和歌や散文で描かれていくことで、中川に転居してまでも兼家への意識に否応なく結ばれていくところがあったのに対して、漢文的表現は、文体また表現世界において、兼家との関係を一旦傍らに置き、距離を取ることが出来るのだ。日次的な日付も、兼家との葛藤が絡まる連綿たる日々を区切る作用を持っていよう。当該記事でわずかに日付がとんでいる二月二十九日・閏二月九日・二十八日と二十九日[24]の部分は、みな漢文的表現が用いられているところで、漢文的表現の自然が描かれていく箇所は兼家との関係から束の間離れられる時空なのであり、日を区切っていく必要がないのだといえよう。兼家との葛藤に引きずり込まれかねない日々を日次の形式を取り入れて区切りつつ距離を保ち、更に、漢文的表現による自然描写が集中している二月末・閏二月末は、兼家の存在と関わらない穏やかな空間を形成している。

先述してきた漢詩文表現は千載佳句に入っている詩句で、当時はその流行していた頃と考えられ、十世紀頃から「『漢文訓読語』なるものが社会的一位相語として固定し、当時の和文語なるものと対立関係に在つた」[25]とも言われている。日次の記に近い表現方法や天候記述に見られた漢文日記の要素は、公人でなくかつ女性である道綱母ではあるが、父や兄弟また夫との関わりの中で漢文日記に接することがあり、そこからはぐくまれてきた教養によるのであろう。またなぜ、兼家との関係から距離を取り相対化していこうとする際にとられたのが漢文的表現なのか考えるならば、女性の手になる日記文学の嚆矢で和歌を発想と表現の軸として書き進められてきたこの作品において、自らに纏わり付く思いから離れようとしたとき、女性の日常感覚と異質な型である漢文

的表現を用いることによって、歌や和文による日々の連綿たる感情とは次元を異にした表現世界を形成することができたのだと言えよう。男性官人による土佐日記は、漢文日記を底に踏まえ訓読語を頻出させながら初期仮名文の姿をあらわし出しているが、蜻蛉日記は逆に、千載佳句も流布し漢文的表現が一般的に固定化されてくる時代相において、自らの自然な文体である和文で書きながらも、生活感覚とは異質で発想や表現の基盤ではない漢文的表現を取り入れることで、兼家への意識に満ちた日常を切り離すことが出来たのだと考える。

漢文的な表現方法はこの箇所にのみ集中的に用いられており、兼家への意識から距離を取り相対化しようとする表現世界を切り開いていたが、しかしそれは、兼家との葛藤を核に形成されてきたこの作品の自己解体ともなっていく。この後兼家の訪れの描写は淡泊になってその存在感は徐々に薄くなり、例えば「大和だつ人」との「道綱恋愛歌群」で息子世代の贈答歌が書き連ねられ、床離れともいわれる中川転居によって兼家の存在は完全に遠景となり、「遠度求婚」も養女をめぐる求婚の経緯を主軸としたものである等、兼家と関わろうとする意識は間接的で求心力を持たず、表現世界は拡散していく。当該部分は、嘆きに傾斜しがちな下巻冒頭を受けて、兼家との関わりに満ちた日々を受け止め齟齬を認識しつつも、そこから距離をとる漢文的表現世界を形成することによって、葛藤から離れ兼家との関係を相対化しようとする方向へと作品の舵をむけている箇所と言えるのである。

※蜻蛉日記の本文は佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引・本文篇』（昭56・風間書房）に、千載佳句の本文は近世初期写の松平文庫蔵本『在九州国文資料影印叢書1』（昭54・在九州国文資料影印叢書刊行会）に、枕草子の本文は『新潮日本古典集成　枕草子』（昭52・新潮社）に、和歌の引用は『新編国歌大観』によった。表記を私に改めたところがある。

注（1）品川和子「蜻蛉日記と漢詩文の関係について」（『学苑』昭38・11）。但し本文中の引用は後に再録された『蜻蛉日記の世界形成』（平2・武蔵野書院）における「蜻蛉日記における方法と源泉・漢詩文との関係について」による。

（2）神谷かをる「女流日記と漢詩文」（『光華女子大学研究紀要』平4・12）。石原昭平「女流日記文学と漢詩文――蜻蛉日記前後と父子同邸・朗詠などを中心に――」（『紀要　中央大学文学部文学科』平6・3）。

（3）小野泰央「『蜻蛉日記』における漢詩文表現」（『東洋文化』平9・3）。

（4）前掲品川論文。

（5）前掲品川論文。

（6）渡辺秀夫「古今集時代における白居易」（『白居易研究講座第三巻』平5・勉誠社）。

（7）秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解　八十三」（『国文学解釈と鑑賞』昭44・7）。

（8）秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解　八十四」（『国文学解釈と鑑賞』昭44・8）。

（9）伊牟田経久「蜻蛉日記の特異語と本文の問題」（『論叢王朝文学』

昭53・笠間書院)。

(10) 木村正中・伊牟田経久校注・訳『新編日本古典文学全集　蜻蛉日記』(平7・小学館)頭注。

(11) 『古語大辞典』(昭58・小学館)「はだら」の項から。

(12) 柿本奨『蜻蛉日記全注釈　下巻』(昭41・角川書店)。

(13) 『大日本古記録』(昭27・岩波書店)による。

(14) 増田繁夫訳・注『全対訳日本古典新書　かげろふ日記』(第五版平3・創英社)

(15) 小島憲之『古今集以前』(昭51・塙書房)。渡辺秀夫『詩歌の森――日本語のイメージ――』(平7・大修館書店)。

(16) 『平安時代史事典』(平6・角川書店)「屋根」「檜皮葺」の項から。

(17) 『平安時代史事典』(平6・角川書店)「瓦」の項から。

(18) 宮島達夫(第三版平4・笠間書院)。

(19) 増田繁夫校注・訳『日本の文学古典編8　蜻蛉日記』(昭61・ほるぷ出版)。

(20) 伊藤博「蜻蛉日記下巻の構成をめぐって」(『山形大学紀要(人文科学)』昭47・1)では、天禄三年一月から三月までの四か月間における「こまかい日付や、この『単なる天候の記録』は、漢文日記のそれとまったく同趣で、いわば習慣的に記されたとも思える叙述方法である」と論じられ、石原昭平「日記文学における時間――日次と月次をめぐって――」(『日本文学』昭52・11)はこの部分に触れて「文学的表現の後退」とされ、野村精一「作品の構造　蜻蛉日記下巻」(『国文学解釈と教材の研究』昭56・1)が、下巻において散乱する数字である日付は「単なる時間の流れの表示として、それは土左日記に、あるいは公家日記に近付いてはいないか」とされるが、積極的に意味づけられてこなかった。

(21) 伊牟田経久「『蜻蛉日記』と漢詩文」(『古典の変容と新生』昭59・明治書院)。

(22) 鈴木一雄「『蜻蛉日記』と『和泉式部日記』――超越的視点の問題を中心に――」(『全講和泉式部日記』改訂版昭58・至文堂)。また『新編日本古典文学全集　蜻蛉日記』頭注。

(23) 守屋省吾「蜻蛉日記下巻考――遠度求婚の経緯をめぐって――」(『論集日記文学』平3・笠間書院)。川村裕子『蜻蛉日記の表現と和歌』(平10・笠間書院)〈第二篇　蜻蛉日記下巻の和歌〉「遠度求婚譚をめぐって」(初出は「蜻蛉日記下巻の一考察――遠度求婚譚をめぐって――」『立教大学日本文学』昭59・7)、「道綱と大和だつ人との和歌贈答を中心として」(初出は「蜻蛉日記下巻の一考察――道綱と大和だつ人との和歌贈答を中心として――」『平安文学研究』昭58・7、「日記文学と和歌――『蜻蛉日記』下巻を中心に――」『王朝和歌を学ぶ人のために』平9・世界思想社)、「道綱と八橋の女との和歌贈答を中心として」(初出は「蜻蛉日記下巻の一考察――道綱と八橋の女との和歌贈答を中心として――」『中古文学』昭60・5)。

(24) 天禄三年二月・閏二月は共に小の月である(『日本暦日原典』第四版平4・雄山閣出版)。

(25) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』第一章第三節「漢文訓読語の性格」(昭38・東京大学出版会)。

[付記] 本稿は、平成十三年十二月における日記文学研究会での発表に基づき改稿したものです。発表後また成稿に際し貴重なご意見を賜りました諸先生方に、心より感謝申し上げます。